

関西大学大学院文学研究科副専攻「EU-日本学」 国際ワークショップ

KU/EU 合同ワークショップ 研究報告要旨集

2022年11月4日（金）

於 オンライン

Proceedings The 14th KU Workshop & The 13th EU Workshop

4th November, 2022

Sub-Major Curriculum EU-Japanology,
Kansai University Graduate School of Letters



KU Leuven

<https://www.kuleuven.be/kuleuven>



関西大学大学院

<https://www.kansai-u.ac.jp>

プログラム

PROGRAMME

2022年11月4日（金）

発表20分・質疑10分

EU時間	日本時間	プログラム	所属	タイトル	発表者
09:30~ 09:40	17:30~ 17:40	プログラム開始のあいさつ・各校の紹介/ Introduction		平井 章一先生（関西大学）	
司会/MC Jan Schmidt先生 (KU Leuven)					
09:40~ 10:10	17:40~ 18:10	発表 1	関大	山上憶良の七夕歌 — 「平凡な作」はほんとうかー The Waka poems about Tanabata written by Okura - They are far from mediocrity	内俊晴 UCHI Toshiharu
10:10~ 10:40	18:10~ 18:40	発表 2	Leuven	「父親の存在意義」 ヤン・ヨンヒの『かぞくのくに』は 愛国心と後悔をどのように描いたのか A Father's Significance – How Yang Yōnghǔi's Kazoku no kuni illustrates patriotism and regret	エリアナ・ ホルヴァット・ カムヴィシ Eliana Horvath Kamvyssi
10:40~ 10:45	18:40~ 18:45	休憩 Break			
司会/MC 井上 主税先生（関西大学）					
10:45~ 11:15	18:45~ 19:15	発表 3	Leuven	戦間期日本外務省の「メディア化」：1921年~1922年のワシ ントン会議における外務省情報部の公報外交活動について The Interwar Japanese Ministry of Foreign Affairs' 'Mediatization': A Case Study of the MOFA Department of Information's Public Diplomacy at the 1921-1922 Washington Conference	ソメン・リーベン Lieven SOMMEN
11:15~ 11:45	19:15~ 19:45	発表 4	関大	弥生墳墓出土土器について The potteries excavated from the Yayoi tombs	西村 葵 NISHIMURA Aoi
11:45~ 11:50	19:45~ 19:50	休憩 Break			
司会/MC 平井 章一先生（関西大学）					
11:50~ 12:20	19:50~ 20:20	発表 5	関大	日本出土の南宋龍泉窯青磁-博多・京都・鎌倉を中心に- the Southern Song Longquan-Kiln Celadon Excavated in Japan -Focusing on Hakata, Kyoto and Kamakura-	王琳婷 WANG Linting
12:20~ 12:50	20:20~ 20:50	発表 6	Leuven	欧州連合の対日貿易政策：一貫性と自律性の観点から Trade Policy of the European Union toward Japan: Cohesiveness and Autonomy	西川 太郎 NISHIKAWA Taro
12:50~ 13:00	20:50~ 21:00	教員による総評・おわりの挨拶/Comments・Closing		Jan Schmidt先生 (KU Leuven)	

山上憶良の七夕歌 —「平凡な作」はほんとうか—

内俊晴（関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程）

本発表は、『万葉集』にある山上憶良の七夕歌（巻第八・一五一八番歌～一五二九番歌）を取り上げ、歌の話者に着目して分類し、それぞれの特徴を明らかにするものである。また、従前の研究では、平凡な作であり面白みに欠けるとの指摘がなされてきたがその妥当性を検討する。

七夕伝説は中国で生まれた伝説であり、大枠を保ったまま日本でも受容されるのであるが、その過程で変容もみられる。もっとも大きな違いは、七夕当日に渡河するのが中国では織女であったものが、日本では牽牛になることである。これは、日本の妻問い婚の風習にあわせて伝説が享受された結果である。すなわち、『万葉集』における七夕歌では、天の川を渡る牽牛とそれを待つ織女、というのが典型的な構図として描かれていることになる。

憶良の七夕歌を話者に基づいて分類すれば、織姫の立場になって詠んだ歌と彦星の立場になって詠んだ歌の大きく二つに分けられる。

織姫の歌は、表現のうえでほかの七夕歌との類歌性が指摘されるものが多く、また、内容としても彦星の訪れを待つ織姫の立場という構図を崩すことがない。加えて、歌の舞台は七月七日その日に設定されており、伝説を詠む歌として典型的な仕上がりになっている。先行研究による平凡な作との評は否定しがたいであろう。

彦星の歌は、表現のうえでほかの七夕歌との類歌性が見出しがたい。きわめて強い中国文学の影響がみられ、漢詩の技法を引用したり漢詩の語彙をそのまま用いたり、集中ほかの七夕歌とは一線を画す表現が用いられている。加えて、歌の舞台は七月七日その日に設定されているものはなく、いずれも七夕以外のときに立って織姫との隔絶を嘆く歌になっている。決して平凡の一言では片づけられない歌々であろう。

これらの特徴を、『万葉集』のほかの七夕歌と比較すれば、織姫の歌は人麻呂歌集七夕歌・作者未詳七夕歌・大伴家持七夕歌のそれと近しく、彦星の歌はそれら歌群とは異質なものとなっている。

山上憶良の織姫の歌を当夜に主眼においた素直な作品とすれば、彦星の歌はいわば挑戦的な作品として詠まれたものではないか、そう考える。

The Waka poems about Tanabata written by Okura - They are far from mediocrity

UCHI Toshiharu (Graduate School of Letters, Master's Program • Kansai University)

Manyo-shu is the oldest anthology of poetry that has been handed down as codex in Japan.

In Manyo-shu, there are 132 Waka poems about Tanabata. Among them, 12 are written by Yamanoue no Okura. They have had reputations for mediocrity by previous studies.

We can classify them into two classes according to the speaker's place: Orihime Waka poems and Hikoboshi Waka poems.

Okura's Orihime Waka poems are similar to other poets' works in Manyo-shu. In addition to that, they are set on July 7th and it is close to the other's Orihime Waka poems. In brief, they are typical of that of Orihime Waka poetry in Manyo-shu.

As opposed to that, Okura's Hikoboshi Waka poems have unique expressions, for example some words are cited from Chinese poetry. Besides this, the ratio of the poems set on July 7th is exceptionally low. To sum up, Okura wrote them as innovative poems. They are far from mediocrity.

弥生墳墓出土土器について

西村 葵（関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程）

本発表では、日本列島の中国地方日本海側地域における弥生墳墓から出土した供献土器を取り上げる。

当地域では、弥生時代中期頃から地山成形や盛土を行った墳墓が出現する。始めは方形で表面を石で装飾する「方形貼石墓」と呼ばれる墳墓が造られ、後に中期の終わり頃に「四隅突出型墳丘墓」という隅部が突出し墳丘の斜面に石が貼り付けられ、こたつのような形状をした墳墓が造られるようになる。この特徴的な墳墓は山陰地域から丹後地域を飛ばして遠く北陸地域まで分布をする。ただし、北陸地域においては、石で墳丘が飾られることはない。また、岡山県や兵庫県にまで点々と分布している。

当地域における弥生墳墓上での葬送儀礼については、一般的に墓上において「供飲供食儀礼」が行われたという説明がなされている。島根県出雲市西谷墳墓群で王墓とされる西谷3号墓が発見されたことにより、葬儀の参列者が墓上において飲食を行うために用いられ、葬儀後、即ち出土状態は「お片付け」をした状態だと説明されている。すなわち、西谷3号墓での出土状態は祭儀の終了の形を表しているのであり、「供献」ではないとした。また、供献土器の出土位置について、主体部に集中して土器が供献される山陰地域の葬送儀礼を「山陰型葬送祭祀」と名付けられているが、出土状態までは言及していない。

そこで、山陰地域における墳墓の事例が蓄積してきた現在、西谷墳墓群以外の墳墓も含めて葬送儀礼の検討を行う段階に来ていると考える。そこで、弥生時代中期から弥生時代後期前半までの西谷3号墓が出現する以前の墳墓について検討を行った。

その結果、西谷墳墓群が出現する以前の墳墓では、弥生時代中期から後期前半にかけて、完形の状態で供えられる墳墓と、破碎された状態で供献された墳墓が存在している。注目すべきは、弥生時代後期に入ると、墳丘規模や墓坑が大きい首長墓と呼べる墳墓では、破碎が主体となっている。しかも、細片類は土器の一部であり、完形に復元することができない。

こうした状態はどういった意味を持つのだろうか。例えば、副葬品を見てみると、折り曲げ鉄器は柄を丸めたり、刃部を故意に折ったりすることで、その機能を失わせている。また、私たち日本人は葬儀の際、出棺前に茶碗を割って、故人との関係を絶つことをしている。こうした器物の「破壊」とそれを「供える」行為は、被葬者と現世を「遮断」しているとも捉えることができる。

このように見ていくと、被葬者と現世の人間との関係性もこれまでの見解とは異なったものであり、「供飲供食儀礼」と一言で片付けられていた現象も、ある時期からの特定の墳墓での行為に過ぎない。

これまで、編年や特定の地域との関係を示す土器など、復元品された状態での検討が占めていたが、今後は、出土状態に基づいた検討も推し進めていくべきだと考える。

The potteries excavated from the Yayoi tombs

Aoi Nishimura (Master's Degree Program • Kansai University Graduate School)

In this presentation, I will take up the potteries excavated from the Yayoi tombs in the Sea of Japan side of the Chugoku region of the Japanese archipelago.

From the middle of the Yayoi period, tombs that have been molded natural ground and piled up soil in this area. At first, a tomb which is square and decorated with stones was built, and later around the end of the middle of the Yayoi period, a tomb which corner was protruded and stones were stuck to the slope of the mound.

It is generally explained that "drinking and eating rituals" were held on the graves of Yayoi tombs in this area.

The discovery of Nishidani No. 3 tomb, which is considered a royal tomb in Izumo City, Shimane Prefecture, explains that the funeral attendees were used to eat and drink on the tomb, and that is, the excavated state was "cleaned up" after the funeral.

Now that the cases of tombs in the Sanin area have accumulated, I believe that we are in the stage of considering the act of dedication, including tombs other than the Nishidani tombs. So, I studied the tomb before the appearance of Nishidani No. 3.

As a result, in the tombs before the appearance of the Nishidani tombs, there are tombs that are offered in a complete form and tombs that are crushed and donated in a small piece state. It is noteworthy that in the late Yayoi period, tombs with large scales and graves were mainly crushed. Furthermore, the small pieces are part of potteries and cannot be completely restored.

The destruction of such objects and the act of "offering" them can also be seen as "blocking" the buried person and the world. In this way, the relationship between the mourners and the people of this world is different from the previous view, and the phenomenon that was cleared up in one word as a "drinking and eating ritual" is only an act at a particular tomb from a certain time.

日本出土の南宋龍泉窯青磁 —博多・京都・鎌倉を中心に—

王琳婷（関西大学文学研究科博士課程後期課程）

本発表は、博多・京都・鎌倉から出土した南宋龍泉窯青磁を通じて、日本中世社会の新たな一側面を研究するものである。

南宋時代(1127-1279年)、龍泉窯の生産した青磁は、厚胎薄釉刻劃花系統と薄胎厚釉系統という二系統に分けられる。このような二系統の論点は出土資料によって検証され、現在では中国国内における龍泉窯生産の研究の主流的視点である。

海外交易が盛んであった南宋では、龍泉窯青磁は貿易陶磁器として日本へ大量に輸入された。当時、博多は日本における中国貿易陶磁器流通の中継地であり、京都は都の所在地、鎌倉は鎌倉幕府の所在地として、日本国内における南宋龍泉窯青磁の流通の研究においてそれぞれ極めて重要な地域であると考えられる。しかし、すでに先学諸氏より指摘されたように、日本における中国貿易陶磁器に関する研究は、中国陶磁史から離れているという問題点があげられる。

従って、本発表は、中国龍泉窯青磁の生産史に基づき、博多・京都・鎌倉から出土した南宋龍泉窯青磁の出土状況をまとめ、日本中世社会と日中交流の一側面の解明を目的とする。

この3地域の出土品と伝世品を分析した結果、まず、日本における出土、および伝世の南宋龍泉窯青磁は、器種からみると、中国国内のものと共通することが判明した。日本向けの製品は生産されていなかった可能性が高いが、中国の他時代や他窯の生産をみると、今後新たな発見を期待できる。つぎに、3地域の出土品と伝世品は比較的に良質のものや高級品が多い。また、出土遺跡は官衙遺跡や有力層の居住地、寺社、墓などが多い。当時の日本では、南宋龍泉窯青磁の使用階層が限られていたことが読み取れる。そして、日本国内の流通中継地として、福岡県内には福岡市や博多のみならず、筑紫郡・久留米市などでも発見され、広範囲にわたって出土した。出土量も日本国内で最も多く、博多の中継地の性格がうかがえる。一方、京都府と神奈川県の出土品はほぼ京都市と鎌倉市に限定される。これは、京都市は天皇や貴族の居住地、鎌倉市は鎌倉幕府の所在であるのが原因だと考えられる。つまり日本における南宋龍泉窯青磁は流通に地域差が存在していた。

以上のように、南宋龍泉窯青磁は一見日本全国幅広く出土、または伝世されているが、実は非常に限られている地域や階層で流通されていたと言える。この点は中国の出土様相と相違がない。このような地域差から、12・13世紀の日本では貧富の差（格差）が著しく存在していたことを傍証できる。

日本では、龍泉窯系磁器が南宋から青磁碗を代表的に、全国各地から豊富に出土したことについては、すでに先学諸氏によって研究されてきた。今後は中国陶磁史に基づき、中国本土、日本、朝鮮半島3地域における南宋龍泉窯磁器の出土様相をまとめた上で、東アジア交流のみならず、東アジア近代化過程の新たな一側面も解明していきたいと考えている。

the Southern Song Longquan-Kiln Celadon Excavated in Japan
-Focusing on Hakata, Kyoto and Kamakura-

Linting WANG (Ph.D. Archaeology, Graduate School of Letters • Kansai University)

During the Southern Song Dynasty (南宋, 1127-1279), the celadon produced by the Longquan kiln (龍泉窯) can be divided into two types: the thick base thin glaze with engraved patterns system (厚胎薄釉刻劃花系統) and the thin base thick glaze system (薄胎厚釉系統).

In the Southern Song Dynasty, when international trade was booming, a large amount of Longquan celadon was imported to Japan as trade ceramics. However, as already pointed out by the previous scholars, in Japan, the problem of the research on Chinese trade ceramics is away from the history of Chinese ceramics.

Therefore, based on the production history of Longquan-kiln celadon porcelain in China, the purpose of this presentation is to elucidate one aspect of the medieval society in Japan and Japan-China exchange by summarizing the excavated state of the Southern Song Longquan-kiln celadon excavated from Hakata (博多), Kyoto (京都) and Kamakura (鎌倉).

As results of analyzing the excavated and the handed-down artifacts from Hakata, Kyoto and Kamakura, first, it was found that the Southern Song Longquan celadon excavated and handed down in Japan are like those found in China in terms of their styles. Second, many of the excavated and handed-down artifacts in these three areas are of relatively high quality. Third, there are many excavated archaeological sites such as government office sites, residences of influential groups, temples and shrines, and graves. And finally, as the place of import and the transfer station in Japan, it was excavated extensively in Fukuoka Prefecture (福岡県). On the other hand, the unearthed items in Kyoto Prefecture (京都府) and Kanagawa Prefecture (神奈川県) are mostly limited to Kyoto City and Kamakura City.

As stated above, the Southern Song Longquan celadon has been excavated or handed down widely throughout Japan, but in fact it can be said that it was distributed in very limited areas and classes. From such regional differences, it can be evidenced that there was economic inequality (social polarization) existed remarkably in Japan in the 12th and 13th centuries.